国貞えがく

泉鏡花

一

柳を植えた……その柳の一処繁った中に、清水の湧く井戸がある。……大通り四ツ角の郵便局で、東京から組んで寄越した若干金の為替を請取って、三ツ巻に包んで、ト先ず懐中に及ぶ。

春は過ぎても、初夏の日の長い、五月中旬、午頃の郵便局は閑なもの。受附にもどの口にも他に立集う人は一人もなかった。が、為替は直ぐ手取早くは受取れなかった。

取扱いが如何にも気長で、

「金額は何ほどですか。差出人は誰でありますか。貴下（あなた）が御当人なのですか。」

などと間伸（まのび）のした、しかも際立（きわだ）って耳につく東京の調子で行（や）る、……その本人は、受取口から見た処（ところ）、二十四、五の青年で、羽織（はおり）は着ずに、小倉（こくら）の袴（はかま）で、久留米（くるめ）らしい絣（かすり）の袷（あわせ）、白い襯衣（しゃつ）を手首で留めた、肥った腕の、肩の辺（あたり）まで捲手（まくりで）で何とも以（もっ）て忙しそうな、そのくせ、する事は薩張（さっぱり）捗（はかど）らぬ。態（なり）に似合わず悠然（ゆうぜん）と落着済（おちつきす）まして、聊（いささ）か権高（けんだか）に見える処（ところ）は、土地の士族の子孫らしい。で、その尻上がりの「ですか」を饒舌（しゃべ）って、時々じろじろと下目（しため）に見越すのが、田舎漢（いなかもの）だと侮（あなど）

るなと言う態度の、それが明（あきら）かに窓から見透（みえす）く。郵便局員貴下（きか）、御心安（おこころやす）かれ、受取人の立田織次（たつたおりじ）も、同国（おなじくに）の平民である。

さて、局の石段を下りると、広々とした四辻（よつつじ）に立った。

「さあ、何処（どこ）へ行（ゆ）こう。」

何処へでも勝手に行くが可（よし）、また何処へも行かないでも可（い）い。このまま、今度の帰省中転（ころ）がってる従姉（いとこ）の家（うち）へ帰っても可（い）いが、其処（そこ）は今しがた出て来たばかり。すぐに取って返せば、忘れ物でもしたように思うであろう。……先祖代々の墓詣（はかまいり）は昨日（きのう）済ますし、久しぶ

りで見たかった公園もその帰りに廻る。約束の会は明日(あした)だし、好(すき)なものは晩に食べさせる、と従姉(いとこ)が言った。差当(さしあた)り何の用もない。何年にも幾日(いくか)にも、こんな暢気(のんき)な事は覚えぬ。おんぶするならしてくれ、で、些(ち)と他愛(たわい)がないほど、のびのびとした心地(ここち)。

　気候は、と言うと、ほかほかが通り越した、これで赫(かっ)と日が当ると、日中は早(はや)じりじりと来そうな頃が、近山曇(ちかやまぐも)りに薄(うっす)りと雲が懸って、真綿(まわた)を日光に干(ほ)すような、ふっくりと軽い暖かさ。午頃(ひるごろ)の蔭もささぬ柳の葉に、ふわふわと柔(やわらか)い風が懸る。……その柳の下を、駈けて通る腕車(くるま)も見えず、人通りはちらほらと、都で

言えば朧夜（おぼろよ）を浮れ出したような状（さま）だけれども、この土地ではこれでも賑（にぎやか）な町の分（ぶん）。城趾（しろあと）のあたり中空（なかぞら）で鳶（とび）が鳴く、と丁（ちょう）ど今が春（しゅん）の鰯（いわし）を焼く匂（におい）がする。

飯を食べに行っても可（よし）、ちょいと珈琲（コオヒイ）に菓子でも可（よし）、何処（どこ）か茶店で茶を飲むでも可（よし）、別にそれにも及ばぬ。が、袷（あわせ）に羽織で身は軽し、駒下駄（こまげた）は新しし、為替は取ったし、ままよ、若干金（なにがし）か貸しても可（い）い。

「いや、串戯（じょうだん）は止（よ）して……」

そうだ！　小北（おぎた）の許（とこ）へ行（ゆ）かねばならぬ——と思うと、のびのびした手足が、きりきりと緊（しま）って、身体（からだ）が帽子まで堅くなった。

何故(なぜ)か四辺(あたり)が視(なが)められる。

こう、小北と姓を言うと、学生で、故郷の旧友のようであるが、そうでない。これは平吉(へいきち)……平(へい)さんと言うが早解(はやわか)り。織次の亡き親父と同じ夥間(なかま)の職人である。此処(ここ)からはもう近い。この柳の通筋(とおりすじ)を突当りに、真蒼(まっさお)な山がある。それへ向って二町(ちょう)ばかり、城の大手(おおて)を右に見て、左へ折れた、屋並(やなみ)の揃(そろ)った町の中ほどに、きちんとして暮しているはず。

その男を訪ねるに仔細(しさい)はないが、訪ねて行(ゆ)くのに、十年越(ごし)の思出がある、……まあ、もう少し秘(ひ)して置こう。

さあ、其処(そこ)へ、となると、早や背後(うしろ)から追立(おった)てられるように、そわそわするのを、なりたけ自分で落着いて、悠々(ゆうゆう)と歩行(ある)き出したが、取って三十という年紀(とし)の、渠(かれ)の胸の騒ぎよう。さては今の時の暢気(のんき)さは、この浪(なみ)が立とうとする用意に、フイと静まった海らしい。

二

この通(とおり)は、渠(かれ)が生れた町とは大分間(あいだ)が離れているから、軒(のき)を並べた両側の家に、別に知己(ちかづき)の顔も見えぬ。それでも何かにつけて思出す事はあった。通りの中ほ

どに、一軒料理屋を兼ねた旅店（りょてん）がある。其処（そこ）へ東京から新任の県知事がお乗込（のりこみ）とあるについて、向った玄関に段々（だんだら）の幕を打ち、水桶（みずおけ）に真新しい柄杓（ひしゃく）を備えて、恭（うやうや）しく盛砂（もりずな）して、門から新筵（あらむしろ）を敷詰（しきつ）めてあるのを、向側の軒下に立って視（なが）めた事がある。通り懸（がか）りのお百姓は、この前を過ぎるのに、

「ああっ、」といって腰をのめらして行った。……御威勢のほどは、後年地方長官会議の節（せつ）に上京なされると、電話第何番と言うのが見得（みえ）の旅館へ宿って、葱（ねぎ）の曖（おくび）で、東京の町へ出らるる御身分とは夢にも思われない。

また夢のようだけれども、今見れば麺麭(パン)屋になった、丁(ちょう)どその硝子(がらす)窓のあるあたりへ、幕を絞って——暑くなると夜店の中へ、見世(みせ)ものの小屋が掛(かか)った。猿芝居、大蛇、熊、盲目(めくら)の墨塗(すみぬり)——(この土俵は星の下に暗かったが)——西洋手品など一廓(ひとくるわ)に、蕺草(どくだみ)の花を咲かせた——表通りへ目に立って、蜘蛛男(くもおとこ)の見世物があった事を思出す。

額(ひたい)の出た、頭の大きい、鼻のしゃくんだ、黄色い顔が、その長さ、大人(おとな)の二倍、やがて一尺、飯櫃形(いびつなり)の天窓(あたま)にチョン髷(まげ)を載せた、身の丈(たけ)というほどのものはない。頤(あご)から爪先の生えたのが、金ぴかの上下(かみしも)を着た処(ところ)は、

アイ来た、と手品師が箱の中から拇指（おやゆび）で摘（つま）み出しそうな中親仁（ちゅうおやじ）。これが看板で、小屋の正面に、鼠（ねずみ）の嫁入（よめいり）に担（かつ）ぎそうな小さな駕籠（かご）の中に、くたりとなって、ふんふんと鼻息を荒くするごとに、その出額（おでこ）に蚯蚓（みみず）のような横筋を畝（うね）らせながら、きょろきょろと、込合（こみあ）う群集（ぐんじゅ）を視（なが）めて控える……口上言（こうじょういい）がその出番に、

「太夫（たゆう）いの、太夫いの。」と呼ぶと、駕籠の中で、しゃっきりと天窓（あたま）を掉立（ふりた）て、

「唯今（ただいま）、それへ。」

とひねこびれた声を出し、頤（あご）をしゃくって衣紋（えもん）を造る。その身動きに、鼬（いたち）の香（におい）を芬（ぷん）とさせて、ひょこひょ

こと行(ゆ)く足取(あしどり)が蜘蛛(くも)の巣を渡るようで、大天窓(おおあたま)の頸窪(ぼんのくぼ)に、附木(つけぎ)ほどな腰板が、ちょこなんと見えたのを憶起(おもいおこ)す。

　それが舞台へ懸る途端に、ふわふわと幕を落す。その時木戸(きど)に立った多勢(おおぜい)の方を見向いて、

「うふん。」といって、目を剥(む)いて、脳天から振下(ぶらさが)ったような、紅(あか)い舌をぺろりと出したのを見て、織次は悚然(ぞっ)として、雲の蒸す月の下を家(うち)へ遁帰(にげかえ)った事がある。

　人間ではあるまい。鳥か、獣(けもの)か、それともやっぱり土蜘蛛(つちぐも)の類(たぐい)かと、訪ねると、……その頃六十ばかりだった織次の祖母(おばあ)さんが、

「あれはの、二股坂（ふたまたざか）の庄屋（しょうや）殿じゃ。」といった。

この二股坂と言うのは、山奥で、可怪（あやし）い伝説が少くない。それを越すと隣国への近路（ちかみち）ながら、人界との境（さかい）を隔（へだ）つ、自然のお関所のように土地の人は思うのである。

この辺（あたり）からは、峰の松に遮（さえぎ）られるから、その姿は見えぬ。最（も）っと乾（いぬい）の位置で、町端（まちはずれ）の方へ退（さが）ると、近山（ちかやま）の背後（うしろ）に海がありそうな雲を隔てて、山の形が歴然（ありあり）と見える。……

汽車が通じてから、はじめて帰ったので、停車場（ステエション）を出た所の、故郷（ふるさと）は、と一目見ると、石を置いた屋根よ

り、赤く塗った柱より、先ずその山を見て、暫時茫然として彳んだのは、つい二、三日前の事であった。腕車を雇って、さして行く従姉の町より、真先に、

「あの山は？」

「二股じゃ。」と車夫が答えた。——織次は、この国に育ったが、用のない町端まで、小児の時には行かなかったので、唯名に聞いた、五月晴の空も、暗い、その山。

三

その時は何んの心もなく、件(くだん)の二股を仰(あお)いだが、此処(ここ)に来て、昔の小屋の前を通ると、あの、蜘蛛大名(くもだいみょう)が庄屋をすると、可怪(あや)しく胸に響くのであった。

まだ、その蜘蛛大名の一座に、胴の太い、脚の短い、芋虫(いもむし)が髪を結(ゆ)って、緋(ひ)の腰布(こしぬの)を捲(ま)いたような侏儒(いっすんぼし)の婦(おんな)が、三人ばかりいた。それが、見世ものの踊(おどり)を済まして、寝しなに町の湯へ入る時は、風呂の縁(ふち)へ両手を掛けて、横に両脚(りょうあし)でドブンと浸(つか)る。そして湯の中でぶくぶくと泳ぐと聞いた。

そう言えば湯屋(ゆや)はまだある。けれども、以前見覚えた、両眼(りょうがん)真黄色(まっきいろ)な絵具の光る、巨大な蜈蚣(むかで)が、赤黒い

雲の如く渦（うず）を巻いた真中に、俵藤太（たわらとうだ）が、弓矢を挟（はさ）んで身構えた暖簾（のれん）が、ただ、男、女と上へ割って、柳湯（やなぎゆ）、と白抜きのに懸替（かけかわ）って、門（かど）の目印の柳と共に、枝垂（しだ）れたようになって、折から森閑（しんかん）と風もない。

人通りも殆ど途絶えた。

が、何処（どこ）ともなく、柳に暗い、湯屋の硝子戸（がらすど）の奥深く、ドブンドブンと、ふと湯の煽（あお）ったような響（ひびき）が聞える。……

立淀（たちよど）んだ織次の耳には、それが二股から遠く伝わる、ものの谺（こだま）のように聞えた。織次の祖母（おおば）は、見世物のその侏儒（いっすんぼし）の婦（おんな）を教えて、

「あの娘(こ)たちはの、蜘蛛庄屋(くもしょうや)にかどわかされて、その妼(こしもと)になったいの。」

と昔語りに話して聞かせた所為(せい)であろう。ああ、薄曇りの空低く、見通しの町は浮上(うきあが)ったように見る目に浅いが、故郷(ふるさと)の山は深い。

また山と言えば思出す、この町の賑(にぎや)かな店々の赫(かっ)と明るい果(はて)を、縦筋(たてすじ)に暗く劃(くぎ)った一条(ひとすじ)の路(みち)を隔てて、数百(すひゃく)の燈火(ともしび)の織目(おりめ)から抜出(ぬけだ)したような薄茫乎(うすぼんやり)として灰色の隈(くま)が暗夜(やみ)に漾(ただよ)う、まばらな人立(ひとだち)を前に控えて、大手前(おおてまえ)の土塀(どべい)の隅(すみ)に、足代板(あじろいた)の高座に乗った、さいもん語りのデロレン坊主、但し長い頭髪(かみのけ)を額(ひたい)に振分(ふりわ)け、

ごろごろと錫（しゃく）を鳴らしつつ、塩辛声（しおからごえ）して、

「……姫松（ひめまつ）どのはエ」と、大宅太郎光国（おおやのたろうみつくに）の恋女房が、滝夜叉姫（たきやしゃひめ）の山寨（さんさい）に捕えられて、小賊（しょうぞく）どもの手に松葉燻（まつばいぶし）となる処（ところ）――樹の枝へ釣上げられ、後手（うしろで）の肱（ひじ）を空（そら）に、反返（そりかえ）る髪を倒（さかさ）に落して、ヒイヒイと咽（むせ）んで泣く。やがて夫の光国が来合わせて助けるというのが、明晩、とあったが、翌晩（あくるばん）もそのままで、次第に姫松の声が渇（か）れる。

「我が夫（つま）いのう、光国どの、助けて給（た）べ。」とばかりで、この武者修業の、足の遅さ。

三晩目（みばんめ）に、漸（やっ）とこさと山の麓（ふもと）へ着いたばかり。

織次は、小児心にも朝から気になって、蚊帳の中でも髣髴と蚊燻しの煙が来るから、続けてその翌晩も聞きに行って、汚い弟子が古浴衣の膝切な奴を、胸の処でだらりとした拳固の矢蔵、片手をぬい、と出し、人の顋をしゃくうような手つきで、銭を強請る、爪の黒い掌へ持っていただけの小遣を載せると、目を睜ったが、黄色い歯でニヤリとして、身体を撫でようとしたので、衝と極が悪く退った頸へ、大粒な雨がポツリと来た。

忽ち大驟雨となったので、蒼くなって駈出して帰ったが、家までは七、八町、その、びしょ濡れさ加減思

うべしで。

あと二夜(ふたよ)ばかりは、空模様を見て親たちが出さなかった。

さて晴れれば晴れるものかな。磨出(みがきだ)した良(い)い月夜に、駒(こま)の手綱を切放(きりはな)されたように飛出(とびだ)して行った時は、もうデロレンの高座は、消えたか、と跡もなく、後幕(うしろまく)一重(ひとえ)引いた、あたりの土塀の破目(われめ)へ、白々(しろじろ)と月が射した。

茫(ぼっ)となって、辻に立って、前夜の雨を怨(うら)めしく、空を仰(あお)ぐ、と皎々(こうこう)として澄渡(すみわた)って、銀河一帯、近い山の端(は)から玉(たま)の橋を町家(まちや)の屋根へ投げ懸ける。その上へ、

真白（まっしろ）な形で、瑠璃（るり）色の透（す）くのに薄い黄金（きん）の輪郭した、さげ結びの帯の見える、うしろ向きで、雲のような女の姿が、すっと立って、するすると月の前を歩行（ある）いて消えた。……織次は、かつ思いかつ歩行（ある）いて、丁（ちょう）どその辻へ来た。

四

湯屋（ゆや）は郵便局の方へ背後（うしろ）になった。

辻の、この辺（あたり）で、月の中空（なかぞら）に雲を渡る婦（おんな）の幻（まぼろし）を見たと思う、屋根の上から、城の大手（おおて）の森をかけて、

一面にどんよりと曇った中に、一筋真白な雲の靡くのは、やがて銀河になる時節も近い。……視むれば、幼い時のその光景を目前に見るようでもあるし、また夢らしくもあれば、前世が兎であった時、木賊の中から、ひょいと覗いた景色かも分らぬ。待て、希くは兎でありたい。二股坂の狸は恐れる。

いや、こうも、他愛のない事を考えるのも、思出すのも、小北の許へ行くにつけて、人は知らず、自分で気が咎める己が心を、我とさあらぬ方へ紛らそうとしたのであった。

さて、この辻から、以前織次の家のあった、某…

…町の方へ、大手筋（おおてすじ）を真直（まっすぐ）に折れて、一丁（ちょう）ばかり行った処（ところ）に、小北の家がある。

両側に軒の並んだ町ながら、この小北の向側（むこうがわ）だけ、一軒づもりポカリと抜けた、一町内の用心水（ようじんみず）の水溜（みずたまり）で、石畳みは強勢（ごうせい）でも、緑晶色（ろくしょういろ）の大溝（おおみぞ）になっている。

向うの溝から鰌（どじょう）によろり、こちらの溝から鰌によろり、と饒舌（しゃべ）るのは、けだしこの水溜（みずたまり）からはじまった事であろう、と夏の夜店へ行帰（ゆきかえ）りに、織次は独（ひと）りでそう考えたもので。

同一（おなじ）早饒舌（はやしゃべ）りの中に、茶釜雨合羽（ちゃがまあまがっぱ）と言うのがある。

トあたかもこの溝の左角（ひだりかど）が、合羽屋（かっぱや）、は面白い。……

まだこの時も、渋紙（しぶかみ）の暖簾（のれん）が懸（かか）った。

　折から人通りが二、三人――中の一人が、彼の前を行過（ゆきす）ぎて、フト見返って、またひょいひょいと尻軽に歩行出（あるきだ）した時、織次は帽子の庇（ひさし）を下げたが、瞳（ひとみ）を屹（きっ）と、溝の前から、件（くだん）の小北の店を透かした。

　此処（ここ）にまた立留（たちどま）って、少時（しばらく）猶予（ためら）っていたのである。

　木格子（きごうし）の中に硝子戸（がらすど）を入れた店の、仕事の道具は見透（みえす）いたが、弟子の前垂（まえだれ）も見えず、主人（あるじ）の平吉が半纏（はんてん）も見えぬ。

　羽織の袖口（そでくち）両方が、胸にぐいと上（あが）るように両腕を組むと、身体（からだ）に勢（いきおい）を入れて、つかつかと足を運んだ。

軒(のき)から直ぐに土間(どま)へ入って、横向きに店の戸を開けながら、

「御免なさいよ。」

「はいはい。」

と軽い返事で、身軽にちょこちょこと茶の間から出た婦(おんな)は、下膨(しもぶく)れの色白で、真中から鬢(びん)を分けた濃い毛の束(たば)ね髪(がみ)、些(ち)と煤(すす)びたが、人形だちの古風な顔。満更(まんざら)の容色(きりょう)ではないが、紺の筒袖(つつそで)の上被衣(うわっぱり)を、浅葱(あさぎ)の紐で胸高(むなだか)にちょっと留(と)めた甲斐甲斐(かいがい)しい女房ぶり。些(ち)と気になるのは、この家(うち)あたりの暮向(くらしむ)きでは、これがつい通りの風俗で、誰(たれ)も怪(あや)しみはしないけれども、畳の上

を尻端折、前垂で膝を隠したばかりで、湯具をそのままの足を、茶の間と店の敷居で留めて、立ち身のなりで口早なものの言いよう。

「何処からおいで遊ばしたえ、何んの御用で。」

と一向気のない、空で覚えたような口上。言つきは慇懃ながら、取附き端のない会釈をする。

「私だ、立田だよ、しばらく。」

もう忘れたか、覚えがあろう、と顔を向ける、と黒目がちでも勢のない、塗ったような瞳を流して、凝と見たが、

「あれ。」と言いさま、ぐったりと膝を支いた。胸を衝

と反らしながら、驚いた風をして、
「どうして貴下（あなた）。」
とひょいと立つと、端折（はしょ）った太脛（ふくらはぎ）の包（つつ）ましい見得（みえ）ものぅ、ト身を返して、背後（うしろ）を見せて、つかつかと摺足（すりあし）して、奥の方（かた）へ駈込みながら、
「もしえ！　もしえ！　ちょっと……立田様の織（おり）さんが。」
「何、立田さんの。」
「織さんですがね。」
「や、それは。」
という平吉の声が台所で。がたがた、土間を踏む

下駄(げた)の音。

五

「さあ、お上(あが)り遊ばして、まあ、どうして貴下(あなた)。」

とまた店口(みせぐち)へ取って返して、女房は立迎(たちむか)える。

「じゃ、御免なさい。」

「どうぞこちらへ。」と、大きな声を出して、満面の笑顔を見せた平吉は、茶の室(ま)を越した見通しの奥へ、台所から駈込んで、幅の広い前垂(まえだれ)で、濡(ぬ)れた手をぐいと拭(ふ)きつつ、

「ずっと、ずっとずっとこちらへ。」ともう真中へ座蒲団を持出して、床の間の方へ直しながら、一ツくるりと立身で廻る。

「構っちゃ可厭だよ。」と衝と茶の間を抜ける時、襖二間の上を渡って、二階の階子段が緩く架る、拭込んだ大戸棚の前で、入ちがいになって、女房は店の方へ、ばたばたと後退りに退った。

その茶の室の長火鉢を挟んで、差むかいに年寄りが二人いた。ああ、まだ達者だと見える。火鉢の向うに踞って、その法然天窓が、火の気の少い灰の上に冷たそうで、鉄瓶より低い処にしなびたのは、もう七十の

上(うえ)になろう。この女房の母親(おふくろ)で、年紀(とし)の相違が五十の上(うえ)、余り間があり過ぎるようだけれども、これは女房が大勢の娘の中に一番末子(すえっこ)である所為(せい)で、それ、黒のけんちゅうの羽織(はおり)を着て、小さな髷(まげ)に鼈甲(べっこう)の耳こじりをちょこんと極(き)めて、手首に輪数珠(わじゅず)を掛けた五十格好の婆(ばばあ)が背後向(うしろむき)に坐ったのが、その総領(そうりょう)の娘である。不沙汰(ぶさた)見舞に来ていたろう。この婆(ばばあ)は、よそへ嫁附(かたづ)いて今は産んだ悴(せがれ)にかかっているはず。悴というのも、煙管(きせる)、簪(かんざし)、同じ事を業(ぎょう)とする。

が、この婆娘(ばばあむすめ)は虫が好かぬ。何為(なぜ)か、その上、幼い記憶に怨恨(うらみ)があるような心持(こころもち)が、一目見ると直ぐ

にむらむらと起ったから――この時黄色い、でっぷりした眉（まゆ）のない顔を上げて、じろりと額（ひたい）で見上げたのを、織次は屹（きっ）と唯一目（ただひとめ）。で、知らぬ顔して奥へ通った。

「南無阿弥陀仏（なあまいだぶ）。」

と折から唸（うな）るように老人（としより）が唱（とな）えると、婆娘（ばばあむすめ）は押冠（おっかぶ）せて、

「南無阿弥陀仏（なあまいだんぶ）。」と生若（なまわか）い声を出す。

「さて、どうも、お珍しいとも、何んとも早や。」と、

平吉は坐りも遣（や）らず、中腰でそわそわ。

「お忙しいかね。」と織次は構わず、更紗（さらさ）の座蒲団を引寄せた。

「ははは、勝手に道楽で忙しいんでしてな、つい暇（ひま）でもございまするしね、怠（なま）け仕事に板前（いたまえ）で庖丁（ほうちょう）の腕前を見せていた所でしてねえ。ええ、織さん、この二、三日は浜で鰯（いわし）がとれますよ。」と縁（えん）へはみ出るくらい端近（はしぢか）に坐ると一緒に、其処（そこ）にあった塵（ちり）を拾って、ト首を捻（ひね）って、土間に棄てた、その手をぐいと摑（つか）んで、指を揉（も）み、

「何時（いつ）、当地（こっち）へ。」

「二、三日前さ。」

「雑（ざっ）と十四、五年になりますな。」

「早いものだね。」

「早いにも、織さん、私なんざもう御覧の通り爺になりましたよ。これじゃ途中で擦違ったぐらいでは、ちょっとお分りになりますまい。」

「否、些とも変らないね、相かわらず意気な人さ。」

「これはしたり！」

と天井抜けに、突出す腕で額を叩いて、

「はっ、恐入ったね。東京仕込のお世辞は強い。人、可加減に願いますぜ。」

と前垂を横に刎ねて、肱を突張り、ぴたりと膝に手を支いて向直る。

「何、串戯なものか。」と言う時、織次は巻莨を火鉢

にして俯向（うつむ）いて莞爾（にっこり）した。面色（おももち）は凛（りん）としながら優（やさ）しかった。

「粗末なお茶でございます、直ぐに、あの、入（いれ）かえますけれど、お一（ひと）ツ。」

と女房が、茶の室（ま）から、半身を摺（ず）らして出た。

「これえ、私（わっし）が事を意気な男だとお言いなさるぜ、御馳走（ごちそう）をしなけりゃ不可（いか）んね。」

「あれ、もし、お膝に。」と、うっかり平吉の言う事も聞落（ききおと）したらしかったのが、織次が膝に落ちた吸殻（すいがら）の灰を弾（はじ）いて、はっとしたように瞼（まぶた）を染めた。

六

「さて、どうも更（あらたま）りましては、何んとも申訳（もうしわけ）のない御無沙汰（ごぶさた）で。否（いえ）、もう、そりゃ実に、烏（からす）の鳴かぬ日はあっても、お噂（うわさ）をしない日はありませんが、なあ、これえ。」

「ええ。」と言った女房の顔色の寂（さび）しいので、烏ばかり鳴くのが分る。が、別に織次は噂をされようとも思わなかった。

平吉は畳（たた）み掛（か）け、

「牛は牛づれとか言うんでえしょう。手前が何します

につけて、これもまた、学校に縁遠い方だったものでえすから、暑さ寒さの御見舞だけと申すのが、書けないものには、飛んだどうも、実印を捺しますより、事も大層になります処から、何とも申訳がございやせん。

何しろ、まあ、御緩りなすって、いずれ今晩は手前どもへ御一泊下さいましょうで。」

と膝をすっと手先で撫でて、取澄ました風をしたのは、それに極った、という体を、仕方で見せたものである。

「串戯じゃない。」と余りその見透いた世辞の苦々し

さに、織次は我知らず打棄（うっちゃ）るように言った。些（ち）とその言（ことば）が激しかったか、

「え。」と、聞直（ききなお）すようにしたが、忽（たちま）ち唇の薄笑（うすわらい）。

「ははあ、御同伴（おつれ）の奥さんがお待兼（まちか）ねで。」

「串戯じゃない。」

「そんなものがあるものかね。」

と今度は穏（おだや）かに微笑（ほほえ）んで、

「そんなものとは？」

「貴下（あなた）、まだ奥様（おくさん）はお持ちなさりませんの。」

と女房、胸を前へ、手を畳にす。

織次は巻莨（まきたばこ）を、ぐいと、さし捨てて、

「持つもんですか。」

「織さん。」

と平吉は薄く刈揃えた頭を掉って、目を据えた。

「まだ、貴下、そんな事を言っていますね。持つものか！　なんて貴下、一生持たないでどうなさる。……また、こりゃお亡くなんなすった父様に代って、一説法せにゃならん。例の晩酌の時と言うとはじまって、貴下が殊の外弱らせられたね。あれを一つ遣りやしょう。」

と片手で小膝をポンと敲き、

「飲みながら可い、召飯りながら聴聞をなさい。

これえ、何を、お銚子を早く。」
「唯、もう燗けてござりえす。」と女房が腰を浮かす、その裾端折で。
織次は、酔った勢で、とも思う事があったので、黙っていた。
「ぬたをの……今、私が擂鉢に拵えて置いた、あれを、鉢に入れて、小皿を二つ、可いか、手綺麗に装わないと食えぬ奴さね。……もう不断、本場で旨いものを食りつけてるから、田舎料理なんぞお口には合わん、何にも入らない、ああ、入らないとも。」
と独りで極めて、もじつく女房を台所へ追立てなが

ら、

「織さん、鰯（いわし）のぬただ、こりゃ御存じの通り、他国にはない味です。これえ、早くしなよ。」

ああ、しばらく。座にその鰯（いわし）の臭気のない内（うち）、言わねばならぬ事がある……

「あの、平さん。」

と織次は若々しいもの言いした。

「此家（こちら）に何だね、僕ン許（とこ）のを買ってもらった、錦絵（にしきえ）があったっけね。」

「へい、錦絵。」と、さも年久（としひさ）しい昔を見るように、瞳（ひとみ）を凝（じっ）と上へあげる。

「内（うち）で困って、……今でも貧乏は同一（おんなじ）だが。」
と織次は屹（きっ）と腕を拱（く）んだ。
「私が学校で要（い）る教科書が買えなかったので、親仁（おやじ）が思切（おもいき）って、阿母（おふくろ）の記念（かたみ）の錦絵を、古本屋に売ったのを、平さんが買戻（かいもど）して、蔵（しま）っといてくれた。その絵の事だよ。」
時雨（しぐれ）の雲の暗い晩、寂しい水菜（みずな）で夕餉（ゆうげ）が済む、と箸（はし）も下に置かぬ前（さき）から、織次はどうしても持たねばならない、と言って強請（ねだ）った、新撰物理書（しんせんぶつりしょ）という四冊ものの黒表紙。これがなければ学校へ通（かよ）われぬと言うのではない。科目は教師が黒板（ボオルド）に書いて教授するのを、筆

記帳へ書取(かきと)って、事は足りたのであるが、皆(みんな)が持ってるから欲しくてならぬ。定価がその時金(きん)八十銭と、覚えている。

七

親父はその晩、一合の酒も飲まないで、燈火(ともしび)の赤黒い、火屋(ほや)の亀裂(ひび)に紙を貼った、笠の煤(すす)けた洋燈(ランプ)の下(もと)に、膳を引いた跡を、直ぐ長火鉢の向うの細工場(さいくば)に立ちもせず、袖(そで)に継(つぎ)のあたった、黒のごろの半襟(はんえり)の破れた、千草色(ちぐさいろ)の半纏(はんてん)の片手を懐(ふところ)に、膝を立てて、それへ

頬杖（ほおづえ）ついて、面長（おもなが）な思案顔を重そうに支（ささ）えて黙然（だんまり）。

ちょっと取着端（とりつきは）がないから、

「だって、欲（ほし）いんだもの。」と言い棄てに、ちょこちょこと板の間（ま）を伝って、だだッ広い、寒い台所へ行（ゆ）く、と向うの隅（すみ）に、霜（しも）が見える……祖母（おばあ）さんが頭巾（ずきん）もなしの真白な小さなおばこで、皿小鉢を、がちがちと冷（つめた）い音で洗ってござる。

「買っとくれよ、よう。」

と聞分（ききわ）けもなく織次がその袂（たもと）にぶら下った。流（ながし）は高い。走りもとの破れた芥箱（ごみばこ）の上下（うえした）を、ちょろちょろと鼠が走って、豆洋燈（まめランプ）が蜘蛛（くも）の巣の中に茫（ぼう）とある……

「よう、買っとくれよ、お弁当は梅干（うめぼし）で可（い）いからさ。」

祖母（としより）は、顔を見て、しばらく黙って、

「おお、どうにかして進ぜよう。」

と洗いさした茶碗をそのまま、前垂（まえだれ）で手を拭（ふ）き拭き、氷のような板の間を、店の畳へ引返（ひきかえ）して、火鉢の前へ、力なげに膝をついて、背後（うしろ）向きに、まだ俯向（うつむ）いたなりの親父を見向いて、

「の、そうさっしゃいよ。」

「なるほど。」

「他の事ではない、あの子も喜ぼう。」

「それでは、母親（おっかさん）、御苦労でございます。」

「何んの、お前。」

と納戸（なんど）へ入って、戸棚から持出した風呂敷包（ふろしきづつみ）が、その錦絵（にしきえ）で、国貞（くにさだ）の画が二百余枚、虫干（むしぼし）の時、雛祭（ひなまつり）、秋の長夜（ながよ）のおりおりごとに、馴染（なじみ）の姉様（あねさま）三千で、下谷（したや）の伊達者（だてしゃ）、深川（ふかがわ）の婀娜者（あだもの）が沢山（たんと）いる。

祖母（おばあ）さんは下に置いて、

「一度見さっしゃるか。」と親父に言った。

「いや、見ますまい。」

と顔を背向（そむ）ける。

祖母（としより）は解（ほど）き掛（か）けた結目（むすびめ）を、そのまま結（ゆわ）えて、ちょいと襟（えり）を引合わせた。細い半襟（はんえり）の半纏（はんてん）の袖（そで）の下に抱（かか）えて、

店のはずれを板の間から、土間へ下りようとして、暗い処（ところ）で、

「可哀（かわい）やの、姉様（あねさま）たち。私（わし）が許（もと）を離れてもの、蜘蛛男（くもおとこ）に買われさっしゃるな、二股坂（ふたまたざか）へ行（ゆ）くまいぞ。」

と小さな声して言聞（いいき）かせた。織次は小児心（こどもごころ）にも、その絵を売って金子（かね）に代えるのである、と思った。……顔馴染（かおなじみ）の濃い紅（くれない）、薄紫（うすむらさき）、雪の膚（はだえ）の姉様（あねさま）たちが、この暗夜（やみのよ）を、すっと門（かど）を出る、……と偶（ふ）と寂しくなった。が、紅（べに）、白粉（おしろい）が何んのその、で、新撰物理書の黒表紙が、四冊並んで、目の前で、ひょい、と躍（おど）った。

「待ってござい、織（おり）や。」

ごろごろと静かな枢戸（くるるど）の音。

台所を、どどんがたがた、鼠が荒野（あれの）と駈廻（かけまわ）る。

と祖母（としより）が軒先から引返して、番傘（ばんがさ）を持って出直（でなお）す時、「あのう、台所の燈（あかり）を消しといてくらっしゃいよ、の。」

で、ガタリと門（かど）の戸がしまった。

コトコトと下駄（げた）の音して、何処（どこ）まで行（ゆ）くぞ、時雨（しぐれ）の脚（あし）が颯（さっ）と通る。あわれ、祖母（としより）に導かれて、振袖（ふりそで）が、詰袖（つめそで）が、褄（つま）を取ったの、裳（もすそ）を引いたの、鼈甲（べっこう）の櫛（くし）の照々（てらてら）する、銀の簪（かんざし）の揺々（ゆらゆら）するのが、真白な脛（はぎ）も露わに、友染（ゆうぜん）の花の幻めいて、雨具もなしに、びしゃびしゃ

と、跣足（はだし）で田舎の、山近（やまぢか）な町の暗夜（やみよ）を辿（たど）る風情（ふぜい）が、雨戸の破目（やぶれめ）を朦朧（もうろう）として透（す）いて見えた。

それも科学の権威である。物理書というのを力に、幼い眼（まなこ）を眩（くら）まして、その美しい姉様たちを、ぼったて、ぼったて、叩き出した、黒表紙のその状（さま）を、後（のち）に思えば鬼であろう。

台所の灯（ともしび）は、遙（はるか）に奥山家（おくやまが）の孤家（ひとつや）の如くに点（とも）れている。

トその壁の上を窓から覗（のぞ）いて、風にも雨にも、ばさばさと髪を揺（ゆす）って、団扇（うちわ）の骨ばかりな顔を出す……隣の空地の棕櫚（しゅろ）の樹が、その夜は妙に寂（しん）として気勢（けはい）も聞

えぬ。

鼠も寂莫（ひっそり）と音を潜（ひそ）めた。……

八

台所と、この上框（あがりがまち）とを隔ての板戸（いたど）に、地方（いなか）の習慣（ならい）で、蘆（あし）の簾（すだれ）の掛ったのが、破れる、断（き）れる、その上、手の届かぬ何年かの煤（すす）がたまって、相馬内裏（そうまだいり）の古御所（ふるごしょ）めく。

その蔭に、遠い灯（あかり）のちらりとするのを背後（うしろ）にして、お納戸色（なんどいろ）の薄い衣（きぬ）で、ひたと板戸に身を寄せて、今出

て行った祖母（としより）の背後影（うしろかげ）を、凝（じっ）と見送る状（さま）に彳（たたず）んだ婦（おんな）がある。

一目見て、幼い織次はこの現世（うつしよ）にない姿を見ながら、驚きもせず、しかし、とぼんとして小さく立った。

その小児（こども）に振向（ふりむ）けた、真白な気高い顔が、雪のように、颯（さっ）と消える、とキリキリキリ——と台所を六角（ろっかく）に井桁（いげた）で仕切った、内井戸（うちいど）の轆轤（ろくろ）が鳴った。が、すぐに、かたりと小皿が響いた。

流（ながし）の処（ところ）に、浅葱（あさぎ）の手絡（てがら）が、時ならず、雲から射す、濃い月影のようにちらちらちらして、黒髪（くろかみ）のおくれ毛がはらはらとかかる、鼻筋のすっと通（とお）った横顔が仄見（ほのみ）えて、

白い拭布（ふきん）がひらりと動いた。

「織坊（おりぼう）。」

と父が呼んだ。

「あい。」

ばたばたと駈出して、その時まで同じ処（ところ）に、画（え）に描（か）いたように静（じっ）として動かなかった草色（くさいろ）の半纏（はんてん）に搦附（からみつ）く。

「ああ、阿母（おっか）のような返事をする。　肖然（そっくり）だ、今の声が。」

と膝へ抱く。　胸に附着（くッつ）き、

「台所に　母様（おっかさん）が。」

「ええ！」と父親が膝を立てた。

「祖母（おばあ）さんの手伝いして。」

親父は、そのまま緊乎と抱いて、

「織坊、本を買って、何を習う。」

「ああ、物理書を皆読むとね、母様のいる処が分るって、先生がそう言ったよ。だから、早く欲しかったの、台所にいるんだもの、もう買わなくとも可い。……おいでよ、父上。」

と手を引張ると、猶予いながら、とぼとぼと畳に空足を踏んで、板の間へ出た。

その跫音より、鼠の駈ける音が激しく、棕櫚の骨がばさりと覗いて、其処に、手絡の影もない。

織次はわっと泣出した。

父は立ちながら背（せな）を擦（さす）って、わなわな震えた。

雨の音が颯（さっ）と高い。

「おお、冷え（つめて）、本降（ほんぶり）、本降。」

と高調子（たかぢょうし）で門を入ったのが、此処（ここ）に差向（さしむか）ったこの、平吉の平（へい）さんであった。

傘（からかさ）をがさりと掛けて、提灯（ちょうちん）をふっと消す、と蠟燭（ろうそく）の匂（におい）が立って、家中（うちじゅう）仏壇の薫（かおり）がした。

「呀（や）！　世話場（せわば）だね、どうなすった、父（とっ）さん。お祖母（としより）は、何処（どこ）へ。」

で、父が一伍一什（いちぶしじゅう）を話すと——

「立替（たてか）えましょう、可惜（あったら）ものを。七貫や八貫で手離す

には当りゃせん。本屋じゃ幾干(いくら)に買うか知れないけれど、差当(さしあた)り、その物理書というのを求めなさる、ね、それだけ此処(ここ)にあれば可(い)い訳(わけ)だ、と先ず言った訳(わけ)だ。先方(さき)の買直(かいね)がぎりぎりの処(ところ)なら買戻(かいもど)すとする。……高く買っていたら破談にするだ、ね。何しろ、ここは一ツ、私に立替えさしてお置きなさい。……そらそら、はじめたはじめた、お株が出たぜえ。こんな事に済まぬも義理もあったものかね、ええ、君。」

と太(ひど)く書生ぶって、

「だから、気が済まないなら、預け給え。僕に、ね、僕は構わん。構わないけれど、唯(ただ)立替えさして気が済

まない、と言うんなら、その金子（かね）の出来るまで、僕が預かって置けば可（よ）うがしょう。さ、それで極（きま）った。……一ツ莞爾（にっこり）としてくれ給え。君、しかし何んだね、これにつけても、小児（こども）に学問なんぞさせねえが可（い）いじゃないかね。くだらない、もうこれ織公（おりこう）も十一、吹鞴（ふいご）ばたばたは勤まるだ。二銭三銭の足（たし）にはなる。ソレ直ぐに鹿尾菜（ひじき）の代（だい）が浮いて出ようというものさ。……実の処（ところ）、僕が小指（レコ）の姉なんぞも、此家（ここ）へ一人二度目妻（にどめの）を世話しようといってますがね、お互にこの職人が小児（こども）に本を買って遣（や）る苦労をするようじゃ、末（すえ）を見込んで嫁入（きて）がないッさ。ね、祖母（としより）が、孫と君の世話をして、

この寒空（さむぞら）に水仕事だ。
因果な婆さんやないかい、と姉がいつでも言ってます。」……とその時言った。

——その姉と言うのが、次室（つぎのま）の長火鉢の処（ところ）に来ている。——

九

そこへ、祖母（としより）が帰って来たが、何んにも言わず、平吉に挨拶（あいさつ）もせぬ先に、

「さあ」と言って、本を出す。

織次は飛んで獅子の座へ直（なお）った勢（いきおい）。上から新撰に飛付（とびつ）く、と突（つん）のめったようになって見た。黒表紙には綾（あや）があって、艶（つや）があって、真黒な胡蝶（ちょうちょう）の天鵝絨（びろうど）の羽のように美しく……一枚開くと、きらきらと字が光って、細流（せせらぎ）のように動いて、何がなしに、言いようのない強い薫（かおり）が芬（ぷん）として、目と口に浸込（しみこ）んで、中に描（か）いた器械の図などは、ずッしり鉄（くろがね）の楯（たて）のように洋燈（ランプ）の前に顕（あらわ）れ出（い）でて、絵の硝子（がらす）が燐（ばっ）と光った。

さて、祖母（としより）の話では、古本屋は、あの錦絵（にしきえ）を五十銭から直（ね）を付け出して、しまいに七十五銭よりは出せぬと言う。きなかもその上はつかぬと断（ことわ）る。欲（ほし）い物理

書は八十銭。何でも直ぐに買って帰って、孫が喜ぶ顔を見たさに、思案に余って、店端（みせさき）に腰を掛けて、時雨（しぐれ）に白髪（しらが）を濡らしていると、其処（そこ）の亭主が、それでは婆さんこうしなよ。此処（ここ）にそれ、はじめの一冊だけ、ちょっと表紙に竹篦（たけべら）の折返しの跡をつけた、古本の出物（でもの）がある。定価から五銭引いて、丁（ちょう）どに鍔（つば）を合わせて置く。で、孫に持って行って遣（や）るが可（い）い、と捌（さば）きを付けた。国貞（くにさだ）の画が雑（ざっ）と二百枚、辛（かろ）うじてこの四冊の、しかも古本と代ったのである。

平吉はいきり出した。何んにも言うなで、一円出した。

「織坊（おりぼう）、母様（おっかさん）の記念（かたみ）だ。お祖母（ばあ）さんと一緒に行って、今度はお前が、背負（しょ）って来い。」

「あい。」

とその四冊を持って立つと、

「路（みち）が悪い、途中で落して汚すとならぬ、一冊だけ持って来さっしゃい、また抱いて寝るのじゃの。」

と祖母（としより）も莞爾（にっこり）して、嫁の記念（かたみ）を取返す、二度目の外出（そとで）はいそいそするのに、手を曳（ひ）かれて、キチンと小口（こぐち）を揃えて置いた、あと三冊の兄弟を、父の膝許（ひざもと）に残しながら、出しなに、台所を竊（そっ）と覗（のぞ）くと、灯（ともしび）は棕櫚（しゅろ）の葉風（はかぜ）に自（おのず）から消えたと覚（おぼ）しく……真の暗がり

に、もう何んにも見えなかった。

雨は小止（こやみ）で。

織次は夜道をただ、夢中で本の香（か）を嗅（か）いで歩行（ある）いた。古本屋は、今日この平吉の家（うち）に来る時通った、確か、あの湯屋（ゆや）から四、五軒手前にあったと思う。四辻（よつじ）へ行（ゆ）く時分に、祖母（としより）が破傘（やぶれがさ）をすぼめると、蒼（あお）く光って、蓋（ふた）を払ったように月が出る。山の形は骨ばかり白く澄（す）んで、兎（うさぎ）のような雲が走る。

織次は偶（ふ）と幻に見た、夜店の頃の銀河の上の婦（おんな）を思って、先刻（さつき）とぼとぼと地獄へ追遣（おいや）られた大勢の姉様（あねさん）は、まさに救われてその通り天にのぼる、と心が勇む。

一足先へ駈出して、見覚えた、古本屋の戸へ附着（くッつ）いたが、店も大戸（おおど）も閉っていた。寒さは寒し、雨は降ったり、町は寂（しん）として何処（どこ）にも灯（ひ）の影は見えぬ。

「もう寝たかの。」

と祖母（としより）がせかせかござって、

「御許（ごゆる）さい、御許さい。」

と遠慮らしく店頭（みせさき）の戸を敲（たた）く。

天窓（あまど）の上でガッタリ音して、

「何んじゃ。」

と言う太い声。箱のような仕切戸（しきりど）から、眉の迫った、頬の膨（ふく）れた、への字の口して、小鼻の筋から 頤（おとがい） へか

けて、べたりと薄髯（うすひげ）の生えた、四角な顔を出したのは古本屋の亭主で。……この顔と、その時の口惜（くやし）さを、織次は如何（いか）にしても忘れられぬ。

絵はもう人に売った、と言った。

見知越（みしりごし）の仁（じん）ならば、知らせて欲（ほし）い、何処（そこ）へ行って頼みたい、と祖母（としより）が言うと、ちょいちょい見懸ける男だが、この土地のものではねえの。越後（えちご）へ行（ゆ）く飛脚だによって、脚（あし）が疾（はや）い。今頃はもう二股（ふたまた）を半分越したろう、と小窓に頬杖（ほおづえ）を支（つ）いて嘲笑（あざわら）った。

縁（えん）の早い、売口（うれくち）の美（い）い別嬪（べっぴん）の画（え）であった。主（ぬし）が帰って間（ま）もない、店の燈許（あかりもと）へ、あの縮緬着物（ちりめんきもの）を散らかして、

扱帯も、襟も引さらげて見ている処へ、三度笠を横っちょで、てしま茣蓙、脚絆穿、草鞋でさっさっと遣って来た、足の高い大男が通りすがりに、じろりと見て、いきなり価をつけて、ずばりと買って、濡らしちゃならぬと腰づけに、きりりと、上帯を結び添えて、雨の中をすたすたと行方知れずよ。……

「分ったか、お婆々。」と言った。

十

断念めかねて、祖母が何か二ツ三ツ口を利くと、

挙句の果が、
「老耄婆め、帰れ。」
と言って、ゴトンと閉めた。
祖母が、卜目を擦った帰途。本を持った織次の手は、氷のように冷めたかった。そこで、小さな懐中へ小口を半分差込んで、圧えるように頤をつけて、悄然とすると、辻の浪花節が語った……
「姫松殿がエ。」
が暗から聞える。――織次は、飛脚に買去られたと言う大勢の姉様が、ぶらぶらと甘干の柿のように、樹の枝に吊下げられて、上げつ下ろしつ、二股坂で苛ま

れるのを、目のあたりに見るように思った。

とやっぱり芬（ぷん）とする懐中（ふところ）の物理書が、その途端に、松葉の燻（いぶ）る臭気（におい）がし出した。

固（もと）より口実、狐が化けた飛脚でのうて、今時（いまどき）町を通るものか。足許（あしもと）を見て買倒（かいたお）した、十倍百倍の儲（もうけ）が惜（おし）さに、貉（むじな）が勝手なことを吐（ほざ）く。引受（ひきう）けたり平吉が。

で、この平さんが、古本屋の店へ居直って、そして買戻（かいもど）してくれた錦絵（にしきえ）である。

が、その後（のち）、折を見て、父が在世（ざいせ）の頃も、その話が出たし、織次も後（のち）に東京から音信（たより）をして、引取（ひきと）ろう、引取ろうと懸合（かけあ）うけれども、ちるの、びるので纏（まと）まら

ず、追っかけて追詰めれば、片音信になって埒が明かぬ。

今日こそ何んでも、という意気込みであった。

さて、その事を話し出すと、それ、案の定、天井睨みの上睡りで、ト先ず空惚けて、漸と気が付いた顔色で、

「はあ、あの江戸絵かね、十六、七年、やがて二昔、久しいもんでさ、あったっけかな。」

と聞きも敢えず……

「ないはずはないじゃないか、あんなに頼んで置いたんだから。……」と何故かこの絵が、いわれある、活

ける恋人の如く、容易（たやす）くは我が手に入（い）らない因縁（いんねん）のように、寝覚めにも懸念して、此家（ここ）へ入るのに肩を聳（そび）やかしたほど、平吉がかかる態度に、織次は早や躁立（いらだ）ち焦（あせ）る。

　平吉は他処事（よそごと）のように仰向（あおむ）いて、

「なあ、これえ。」

と戸棚の前で、膳ごしらえする女房を頤（あご）で呼んで、

「知るまいな。忘れたろうよ、な、な、お前も、あの、江戸絵さ、蔵の中にあったっけか。」

「唯（はい）、ござりえす、出しますかえ。」と女房は判然（はっきり）言った。

「難有（ありがと）う、お琴（こと）さん。」

とはじめて親しげに名を言って、凝（じっ）と振向くと、浪（なみ）の浅葱（あさぎ）の暖簾越（のれんごし）に、また颯（さっ）と顔を赧（あか）らめた処（ところ）は、どうやら、あの錦絵の中の、その、どの一人かに俤（おもかげ）が幽（かすか）に似通（にかよ）う。……

「お一つ。」

とそこへ膳を直（なお）して銚子（ちょうし）を取った。変れば変るもので、まだ、七八（ななや）ツ九（ここの）ツばかり、母が存生（ぞんしょう）の頃の雛祭（ひなまつり）には、緋（ひ）の毛氈（もうせん）を掛けた桃桜（ももさくら）の壇の前に、小さな蒔絵（まきえ）の膳に並んで、この猪口（ちょこ）ほどな塗椀（ぬりわん）で、一緒に蜆（しじみ）の汁（つゆ）を替えた時は、この娘が、練物（ねりもの）のような顔のほかは、

着くるんだ花の友染で、その時分から円い背を、些と背屈みに座る癖で、今もその通りなのが、こうまで変った。

平吉は既う五十の上、女房はまだ二十の上を、二ツか、多くて三ツであろう。この姉だった平吉の前の家内が死んだあとを、十四、五の、まだ鳥も宿らぬ花が、夜半の嵐に散らされた。はじめ孫とも見えたのが、やがて娘らしく、妹らしく、こうした処では消しくなって、女房ぶりも哀に見える。

これも飛脚に攫われて、平吉の手に捕われた、一枚の絵であろう。

いや、何んにつけても、早く、とまた屹と居直ると、女房の返事に、苦い顔して、横睨みをした平吉が、

「だが、何だぜ、これえ、何それ、何、あの貸したきりになってるはずだぜ。催促はするがね……それ、な、これえ。まだ、あのまま返って来ないよ、そうだよ。ああ、そうだよ。」

と幾度も一人で合点み、

「ええ、織さん、いや、どうも、あの江戸絵ですがな、近所合壁、親類中の評判で、平吉が許へ行ったら、大黒柱より江戸絵を見い、という騒ぎで、来るほどに、集るほどに、丁と片時も落着いていた験はがあせん。」

と蔵の中に、何とやらと言った、その口の下……
「手前（てまえ）じゃ、まあ、持物（もちもの）と言ったようなものの、言わばね、織さん、何んですわえ。それ、貴下（あなた）から預かっているも同然な品なんだから、出入れには、自然、指垢（ゆびあか）、手擦（てずれ）、つい汚れがちにもなりやしょうで、見せぬと言えば喧嘩（けんか）になる……弱るの何んの。そこで先ず、貸したように、預けたように、余所（よそ）の蔵に秘（しま）ってありますわ。ところが、それ。」
と、これも気色（けしき）ばんだ女房の顔を、兀上（はげあが）った額越（ひたいごし）に、ト睨（や）って、
「その蔵持（くらもち）の家（うち）には、手前が何でさ、……些（ち）とその

銭式（レコしき）の不義理があって、当分顔の出せない、といったような訳（わけ）で、いずれ、取って来ます。取って来るには取って来ますが、ついちょっと、ソレ銭式（レコしき）の事ですからな。

それに、織さん、近頃じゃ価（ね）が出ましたっさ。錦絵（にしきえ）は……唯（たっ）た一枚が、雑とあの当時の二百枚だってね、大事のものです。貴下（あなた）にも大事のもので、またこっちも大事のものでさ。価（ね）は惜（おし）まぬ、ね、価（ね）は惜まぬから手放さないか、と何度（なんたび）も言われますがね、売るものですか。そりゃ売らない。憚（はばか）りながら平吉売らないね。預りものだ、手放して可（い）いものですかい。

けれども、おいそれとは今言ったような工合ですから、いずれ、その何んでさ。ま、ま、めし飲(あが)れ、熱い処(ところ)を。ね、御緩(ごゆっく)り。さあ、これえ、お焼物(やきもの)がない。ええ、間抜けな、ぬたばかり。これえ、御酒(ごしゅ)に尾頭(おかしら)は附物(つきもの)だわ。ぬたばかり、いやぬたぬたとぬたった婦(おんな)だ。へへへへ、鰯(いわし)を焼きな、気は心よ、な、鰯をよ。」

と何か言いたそうに、膝で、もじもじして、平吉の額(ひたい)をぬすみ見る女房の様(さま)は、湯船(ゆぶね)へ横飛びにざぶんと入る、あの見世物の婦(おんな)らしい。これも平吉に買われたために、姿まで変ったのであろう。

坐り直って、

「あなたえ。」

と怨(うら)めしそうな、情(なさけ)ない顔をする。

ぎょろりと目を剥(む)き、険(けん)な面(つら)で、

「これえ。」と言った。

が、鰯(いわし)の催促をしたようで。

「今、焼いとるんや。」

と隣室(となり)の茶の室(ま)で、女房の、その、上の姉が皺(しな)びた声。

「なんまいだ。」

と婆(ばば)が唱(とな)える。……これが――「姫松殿(ひめまつどの)がえ。」と耳を貫く。……称名(しょうみょう)の中から、じりじりと脂肪(あぶら)の煮え

る響がして、腥いのが、むらむらと来た。

この臭気が、偶と、あの黒表紙に肖然だと思った。

とそれならぬ、姉様が、山賊の手に松葉燻しの、乱るる、揺めく、黒髪までが目前にちらつく。

織次は激くいった。

「平吉、金子でつく話はつけよう。鰯は待て。」

底本：「鏡花短篇集」岩波文庫、岩波書店
1987（昭和62）年9月16日第1刷発行
1999（平成11）年3月15日第19刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第十二巻」岩波書店
1942（昭和17）年4月初版発行
初出：「太陽」
1910（明治10）年1月号
※底本の親本は総ルビ。底本作成時にルビが取捨選択されています。
入力：今中一時
校正：青木直子

１９９９年12月16日公開
２００５年12月２日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。